

## 腔腸動物数種の活動について

今福道夫(京大・理・植生研)

On the activity of some coelenterate species

MICHIO IMAFUKU

腔腸動物花虫類の活動について「花虫類に属する多くの動物は一般に夜行性であるが共生藻を多量にもつものは昼行性である」という説がある。この説を検討するため花虫類に属する数種の動物の活動を記録した。記録は自然条件下あるいは実験水槽中の動物を一時間ごとに写真撮影することによって行なった。その結果、共生藻をもたないヤナギウミエラ、オオトゲトサカ、イソギンチャクの種類 *Telmatactis* sp. は夜行性であり、共生藻を多く持つオオサンゴイソギンチャク、ハナガササンゴは昼行性であった。したがってこの結果は上記の説を支持するものである。一方、サンゴやヤギの仲間には昼も夜もともに活動すると言われている種もあるので、今後さらにこれらのものや他の多くの花虫類の活動について詳しく検討する必要があるだろう。

数種の淡水魚の縞模様環境の選択——特にオヤニラミ *Coreoperca kawamebari* について

香田康年(岡山大・教養・生)

Choice between striped patterns in several freshwater fishes——with special reference to *Coreoperca kawamebari*

YASUTOSHI KOHDA

体側に黒い垂直縞模様をもつ淡水魚オヤニラミ (*Coreoperca kawamebari*) が、水平縞模様環境より垂直縞模様環境の方を選択する傾向を示すことはすでに報告した(1975年度本大会)。さらに他の数種の淡水魚で縞模様選択性を調べたところ、一般に水平縞模様からの回避がみられたが、縞模様区域内の滞在時間が短いため明確な回避傾向をもつとは結論しがたかった(1976年度中国四国支部大会で報告)。今回大型の水槽(150×100×50cm<sup>3</sup>)を用い、縞模様区域を水槽壁面から離れた装置で数種の魚の縞模様選択性を調べた。材料はオヤニラミの他、チョウセンブナ (*Macropodus chinensis*)、フナ (*Carassius carassius*)、アブラボテ (*Acheilognathus limbata*)、cherry barb (*Barbus titteya*)、および yellow-striped cichlid (*Pseudotropheus auratus*) であった。1回の観察時間は30分とし、魚を実験水槽に移した直後と魚が充分水槽に順応したと思われる20時間以上後の2回観察を行ない、以下の結果を得た。(1) 縞模様区域内の滞在時間が一般的に長くなった。(2) 垂直縞模様をもつオヤニラミは明確な垂直縞模様選択性を示した。同じく垂直縞模様をもつチョウセンブナは水槽に移した直後のみ垂直縞模様選択性を示した。(3) 縞模様をもたぬフナ、アブラボテは弱いながらも垂直縞模様選択性を示した。ただしアブラボテのその傾向は20時間順応後のみであった。(4) 水平縞模様をもつ cherry barb は縞模様選択性を示さなかったが、yellow-striped cichlid は20時間順応後には水平縞模様選択性を示した。以上の結果から魚のもつ縞模様とその魚の縞模様選択性にはかなりの程度の相関関係があるように思われる。